音　楽　科

乗　富　章　子
今　井　直　人
橋　本　俊　彦

1　音楽科における知識創造とは

生活と音楽とのかかわり
ＢＧＭの影響
音楽の潜在的価値

音楽は、私たちの日常のごく身近なところにあって、生活に潤いを与える存在として欠くことのできない価値をもっている。そこには、音楽そのものを積極的に楽しむものだけではなく、BGM（BackGround Music）などによって、思考・感情が大きく影響されるという音楽の潜在的価値も含まれている。

学校教育における音楽（以下、音楽科）は、音楽と直接的にかかわる教科学習を中心にして、様々な音や音楽に出会う場である。子どもは、音や音楽を表現及び鑑賞する活動を通して感受する心を日々育んでいる。その心の発達は、音楽的な技能の意欲向上にも深く結びついており、音楽の潜在的価値と融合することで、生涯学習につながる新たな音楽性として生きるものとなる。

音楽性
音楽を理解し、そのおもしろさや美しさを感じ取ること
音楽的スキーマ
音楽を表現・鑑賞するために必要となる経験と能力
音楽性の高まり

音楽科の活動を進めるためには、子ども一人一人が音楽的スキーマをもち、音楽的な視点で友達と積極的にかかわり、ともに表現することでしか得られない気づきや喜びが大切となる。子どもは、音楽的スキーマの個人差を互いに認め合いながらも、新しい刺激として相互に作用させながら活動することで、個々に音楽的スキーマを培ってきている。

子どもは、音や音楽から感じ取ったことを周囲に伝えるために、きれいや美しいといった漠然とした感想から、音色や旋律のある部分がどのようだという楽曲に即した細かな感想まで、言葉によって多くを表現する。しかし、音楽性は、感じたことを言葉で表す力のほかに、音楽的な感受力や表現の技能、鑑賞の能力も合わせて求めることで高まっていくものである。言葉ではうまく表せないことでも、音楽ならば伝え合うことができるであろう。

音楽科と知識創造

知識創造という視点で音楽科をとらえると、次のように考えることができる。子どもは、新しく音や音楽に出会うことで、音楽的スキーマや生活経験から何かしらの感想を抱くことになる。それを互いに言葉や音楽で伝え合う中で、新たな気づきが生まれてくる。子ども一人一人が音や音楽に対して主体的に向き合い、友達の表現するものを意識して聴き、何かを感じ取ることで、新たな気づきが生まれる。また、その感じ取り方にも個人差があり、互いに表出することを繰り返す中で、音楽性を高めることに結びついている。また、ともに音や音楽を表現する活動は、言葉では伝えることのできない新たな気づきを生み出している。

以上のことから、音楽科における知識創造を以下のように定義する。

音楽科における知識創造の定義

様々な音や音楽に自分なりの感じ方で向き合い　表現や鑑賞の活動を通して　互いにかかわり合う中で　自らの音楽性を高めていく営み

2　音楽科における「プロセスの自覚」を促す・活かすために

⑴　音楽科における「よさ」

音楽科における「よさ」とは、表現や鑑賞の活動を通して、子どもが音や音楽に出合い触れることで、音楽に対する感性が豊かになっていくこと、また豊かになることで音楽を愛好する心情が養われていくことである。そこには、音楽をともに共有することでしか得られない喜びが数多く存在し、この「よさ」を下支えしている。

音楽的な要素
音楽を特徴付けているリズム、旋律、強弱、速度、音色など

音楽活動を進めるにあたっては、基礎的な能力を培っていくことも求められ、何を目的として何に取り組み、どんな活動が目的に近づくことにつながるかを音楽的な要素に即して技能面としてとらえることができる気づきも「よさ」である。

⑵　「よさ」の共有のための手だて

①　可視化

音楽は一瞬の芸術である

楽譜や楽器のような表現するためのツール、あるいは表現する人、鑑賞する人は目に見えて存在するが、音楽そのものは「音楽は一瞬の芸術である」という言

葉があるように、すぐに消えてしまう。そのため、高い評価を感じる表現を聴いても、自分のものとして表現するとなれば容易ではない。また音楽には言葉で表現しきれない部分が多く存在することから、ふりかえりシートなどの文章でまとめることばかりではない。

そこで、子ども一人一人が音楽活動の軌跡を明確につかみ、その繰り返しがプロセスの自覚につながるととらえ、以下のような手だてを講ずる。

身体で聴き表現する
・音や音楽を身体で感じながら聴くことで、拍子感やリズム、強弱などがつかめているかをふりかえる。

楽譜などへの書き込み
・楽譜などのツールに書き込むことで、自分の感じたこと・考えたことを内容やポイントを焦点化する。

ポイントをしぼって聴く
・音色やフレーズなどの音楽的な要素をしぼって聴くことで、どの要素について聴き取る力が定着してきたかがわかる。

録音・録画して再生
・録音・録画をした自らの表現を再生して鑑賞することで、できるようになったことや新たな課題を見つける。

音楽ソフトの活用
・コンピュータ及び音楽ソフトを用いることで、表現した音楽（音程やリズムなど）の正確さの変遷を把握する。

これらの手だてによって表現されたものは、全体または小集団として、また子ども一人一人にとって、可視化することで同時に有意味化される。また、表出されることで同時に評価される部分も含んでいる。そのため、子どもの意欲が向上するような心情面の配慮も大切である。

②　「かかわり」

目標の明確化

表現活動においては、活動を進める前に、自分あるいは自分たちは、どのような表現を目指そうとしているのかを明確にして、それを目標として共有することが必要である。そして、その場のかかわりに終わらず、常に目標に立ち返る視点をもった「かかわり」が大切である。

段階的な活動計画

具体的には、どんな音楽的な要素が音楽を特徴づけているのかに気づき、どのように向上することで目標に近づくことができるのかを、ステップを設定した活動を取り入れることで明らかにしていく。音程やリズムという基本となるものから、フレーズや歌詞といった曲の表情づけまで段階的に取り組ませ、個々の感じ方・考え方の差異を楽譜やメモをもとに焦点化する。また、聴き手を設け、聴くポイントを明確にして聴き取らせ、表現した人にポイントを中心に伝えられるようにする。聴き手には、表情やジェスチャーなど身体をつかって視覚的な聴き方を工夫することで、表現している人にリアルタイムに伝えられるようにする。消えてしまう音楽表現を他者から評価され、価値づけされることはとても大きな意味がある。

感じ方・考え方の差異の焦点化

聴き方の工夫

客観的な評価

分析的な聴き取り

鑑賞活動においては、漠然と聴いた一度目の感想をもとに、その感想がどのような音楽的な要素の影響を受けているのか、友達がなぜ自分と異なる感じ方をしたのかを分析的に聴き取る活動を取り入れる。ときには、おもしろいリズムだと感じたときに挙手したり、音楽に合わせて身体をつかって表現したりという聴き方もあろう。また、二つ以上の表現（または鑑賞曲）を聴きくらべる場を設定し、音楽的な要素に基づいて細かな表現の違いに気づかせる。

音楽性を高めていくためには、音楽に出会って何となく感じた思いを、発達段階に応じて、少しずつ音楽的な裏づけをもって感じ取れるような評価活動が求められる。また、個人差であったり感じ方の違いであったりという様々な要因も考慮しつつ、「かかわり」の中で評価されることが次の音楽活動に活かされてくることが大切である。

③　実践的自覚へのデザイン

子ども一人一人が、どうしてそう感じたのかを音楽的な要素に照らし合わせて感じ取ったり発言したりできるようになることが大切である。同時に、音や音楽の美しさやおもしろさなどを味わうことができる心情を育てたい。

音楽を楽しめる環境整備

集団として認め合える授業設計

自らの思いを音楽や言葉で表現するためには、それを表現することができる受け皿が必要である。みんなで音楽を楽しめる環境整備は、素直に音楽に向き合い、音楽を感じ、率直にかかわり合えるために欠かせない。そのため、日ごろから、集団として認め合い、個々の伸長を理解し合える授業設計が求められる。